

富山県大門町

串田新遺跡IV

—昭和56年環境整備に伴なう試掘調査—

1982年3月

大門町教育委員会

例 言 1. 本書は、昭和56年度串田新遺跡環境整備事業に伴なう試掘調査の結果をまとめたものである。

2. 調査主体は、大門町教育委員会（教育長 岡本甚三）であり史跡環境整備の国庫補助を受けている。

3. 発掘調査は、同教育主事高橋修宏が担当し、これを実施したが、下記の方々の参加を得た。

山森伸正（調査員）、大坪四郎、大居晴信、山崎長太郎、寺本右人、炭谷健三、西田慶喜、高田為二（作業員）

4. 出土品整理にあたっては、山森伸正、高田典子の協力を得ている。

5. 本書の編集、執筆は高橋修宏が行なった。

6. 調査及び出土遺物について、小島俊彰（金沢美術工芸大学助教授）、神保孝造（富山県埋蔵文化財センター）の各氏の御教示を得た。記して謝意を表したい。

目 次	I. はじめに.....	2	第7図 石器実測図(1)
	II. 調査の概要.....	2	第8図 石器実測図(2)
	III. 出土遺物.....	5	
	1. 土器.....	5	図版1 第3トレンチ
	2. 石器.....	7	土器出土状況
	IV. おわりに.....	13	図版2 繩文中期前・中葉の土器
	引用参考文献.....	14	繩文中期後葉の土器(1)
	第1図 串田新遺跡と周辺の主な遺跡		図版3 繩文中期後葉の土器(2)(3)
	第2図 調査地点 (1/1500)		図版4 繩文中期末葉～後期初頭の土器
	第3図 試掘溝土層図		繩文後期前葉の土器
	第4図 土器実測図(1)		図版5 繩文中期後葉、中期末葉～後期
	第5図 土器実測図(2)		初頭の土器
	第6図 土器実測図(3)		図版6 石器



第1図 串田新遺跡と周辺の主な遺跡

- | | |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1. 串田新遺跡（先土器、縄文、古墳初期） | 8. 島鉾田遺跡（古墳初期） |
| 2. 生源寺新遺跡（先土器、縄文） | 9. 流通業務団地遺跡群（縄文、古墳、奈良） |
| 3. 生源寺新B遺跡（縄文、須恵） | 10. 五歩一古墳群 11. 宿屋古墳 |
| 4. 大塚古墳 5. 生源寺遺跡（奈良、近世） | 12. 上野遺跡（先土器、縄文、古墳初期、古墳、奈良～平安、近世） |
| 6. 市ノ井遺跡（弥生） | 13. 日ノ宮古墳群 |
| 7. 小泉遺跡（縄文、中世） | |

I はじめに

串田新遺跡は、富山県射水郡大門町串田新の通称「大沢山」と呼ばれる独立丘陵上に所在する。標高は約45~46mを呈する。この「大沢山」の東側は、その直下を流れる和田川の浸食により急峻な崖状をなしており、その対岸には射水丘陵が広がっている。

本遺跡は、北陸の繩文時代中期後葉の編年的示標となる「串田新式」の標式遺跡としてかねてより著名であり、調査研究の歴史も長い（小杉高校地歴班、1952、橋本、神保、1973）。また、最近、遺跡の北東地区の範囲確認調査により古墳時代初期（塚崎II、III期）の住居址群が検出され、従来より知られていた墳墓群とセットとして古墳時代初期の良好な遺跡であることが判明した（中山、1981a）。

一方、本遺跡は昭和53年度より大門町を事業主体として、国指定史跡「串田新遺跡」環境整備事業が継続実施されている。昭和56年度の整備事業の主な内容は、北側斜面の芝張、園路整備、復元景観レリーフの作成、見晴台（パーゴラ）の設置、低木植栽などである。

この整備事業で遺跡北側に設置される見晴台については、「基本計画書」（大門町、1977）における展望棟にかわるものであり、文化庁、県教委文化課及び串田新遺跡整備専門委員会等において事前協議の結果、その設置に先立ち試掘調査を行ない遺構の有無を確認し、その遺存状況に即して設置箇所及び設置に係わる工法の検討を行なうことになった。そのため今回、遺構の有無等の確認のため本書の試掘調査を実施したわけである。見晴台の設置予定地は、「基本計画書」にもとづき昭和56年度環境整備実施設計（丹青社、科学造形センター設計）において、北側斜面よりの遺跡北西部の箇所に定め、その地点を中心に試掘調査を行なった。

調査は、昭和56年10月19日から10月30日までの期間であり、延8日間である。

II 調査の概要

調査地点は、遺跡中央よりほぼ北西方向にあたる箇所であり、北側の緩やかな斜面の縁辺部分にあたる。調査には、2m幅の試掘溝を北側斜面に対して3本設定した（第2図参照）。各々を西側より第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチ（以下、1T、2T、3Tと略記）と命名する。

層序は、1T~3Tまでほとんど変化なく平均35cmの厚さの黒褐色土を呈する耕作土（第1層）の下に、15~20cmの若干粘質を帯びる黒褐色土層（第2層）が堆積し、地山の黄褐色土層（第3層）である。

第2図 調査地 点(1/1500)

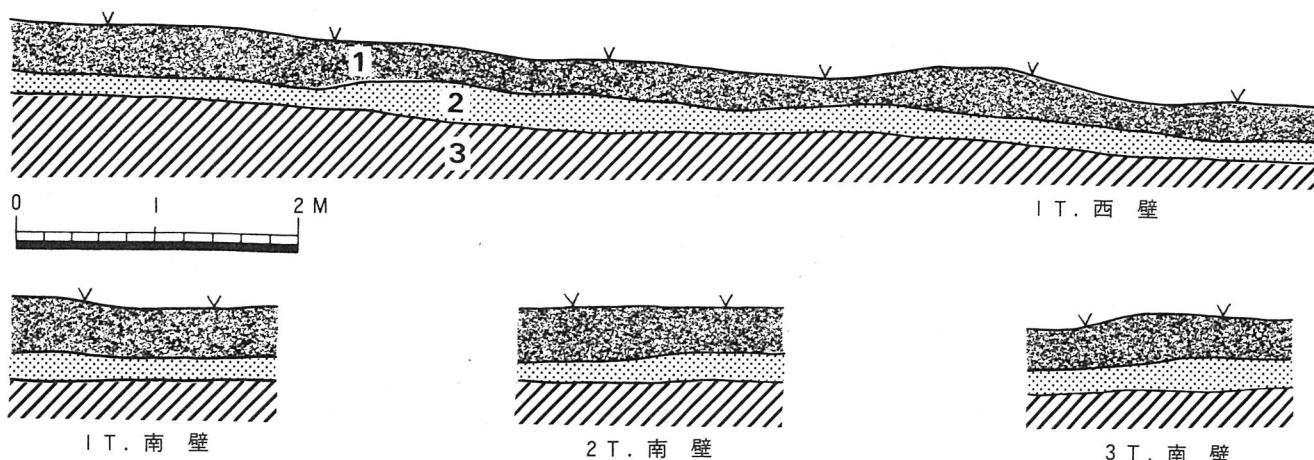


色ローム層（第3層）へと続く（第3図参照）。いわゆる遺物包含層は、第2層の黒褐色土層と思われるが、第1層との区別は色調からだけでは極めて困難である。このような層序は、基本的にこれまでの調査による知見と同様なものと言える。

出土遺物は、各トレンチともに第1層から第2層にわたりかなり濃密に検出できる。遺物は、縄文土器・石器がほとんどであり、時期的には中期後葉を中心として中期前葉から後期初頭にわたる。だが、層位的な区別はほとんど不可能であり、遺物も多量であるのに比して接合のできない破片等が極めて多いことがひとつの特徴である。

これら遺物の出土状況は、発見された遺物がかなり長期間にわたるにもかかわらず混在して検出されており、土器、石器等の北側斜面部への廃棄行為を示唆しているものと思われる。だが一方、調査地点は近年まで梨畠等の果樹栽培が行なわれており、遺物包含層の比較的浅いことと相まって耕作等による後世の攪乱の可能性も充分に考慮していかなくてはならない。

また、第2層中において、集石状のものがいくらか検出できたが、当該期の遺構のひとつと考えることは困難であり、後世の所産である可能性が高い。また、1Tにおいてローム層直上に焼土塊が二ヶ所認められ、遺構と係わるものではないかと推定されるが、遺存状況が極めて悪く詳しくは知りえなかった。



第3図 試掘溝土層図

- 1層 黒褐色土（耕作土）
- 2層 黒褐色土（やや粘質およびロームブロック混入）
- 3層 黄褐色ローム（地山）

III 出 土 遺 物

1. 土 器

試掘調査で発見された遺物は、繩文土器、石器、石製器等である。繩文土器については、中期前葉から後期前葉までの長い期間にわたるものであるが、中期前・中葉及び後期前葉に属する土器は少量であり、中期後葉を中心とする土器群が圧倒的に多く主体を占めている。

①中期前葉の土器（図版2・上）

口縁部の半隆起線文間を繩文で充填するキャリパー形の土器や、口縁部にいわゆる蓮華文を施文する土器である。

広義の新崎式に比定できよう。

②中期中葉の土器（図版2・上）

半載竹管による半隆起線文で構成される土器で、渦巻状のモチーフなどが多く描かれている。基隆起帶上には、ヘラ状工具などで刻まれるものも認められる。

所謂、天神山b式、吉府式に比定できよう。

③中期後葉の土器

第I群土器（第4図1・2、第5図14、第6図20、図版3・上、5）

串田新I式に比定される土器であり、これに先行する古串田新式と明らかに認められるものは検出されていない。

第4図1・2は、ともに口縁部に粗大な沈線により工状の区画文を配する土器である。いずれも工状区画文は二段であり、1は口縁部上端に貝殻腹縁による押圧文（貝殻擬繩文）が施され、口縁が二単位の小波状突起をなし、口唇部に一条の沈線をめぐらしている。2は、工状の沈線間に粗大な列点文を施しており、胴部にはR Lの繩文が施文されている。なお、2の口縁部の施文工程は、平行沈線（2条）→区画沈線→縦位の短沈線及び列点文である。第6図20は台付土器であるが、口縁に二条の隆帯を施し、その間をヘラ状工具で縦位の短沈線を引いている。第5図14は、割合小さな底部であるが、隆帯上に刺突が施されており、この期の波状深鉢等の底部と考えられる。

第II群土器（第4図3・4、第5図7～13、第8図15～18、図版2・下、3・下、5）

串田新II式に比定できる土器を一括した。

第5図7～9は波状深鉢であり、波頭部が8は5単位、9は6単位であり、この期にし

ては特異である。7、8は、いずれも口縁部に一条の隆帯を貼りつけており、胴部は繩文を施文する。7～9の繩文は、いずれもLRの単節斜繩文である。第5図10、11は、所謂葉脈状文を有する土器であり、11は胴部のみだが隆帯を縦に垂下させ、その中に沈線で葉脈状文を描く。10は、隆帯を葉脈の基軸にしているが、葉脈状文が乱れており、その上部のめがね状の隆帶上には半載竹管による連続刺突が施される。口縁部は無文帯になるようである。第6図18は隆帯を貼りその上に連続刺突を行ない、隆帯間には基軸のない葉脈状文（綾杉文）が施される。

第5図13は浅鉢もしくは台付土器と思われヘラ状工具による連続刺突を有する一条の突帯を貼り、それより下部を櫛状工具等による条線を施す。このような条線は、12及び15にも共通するものである。4は隆帶上をヘラ状工具による列点、3は口縁部の肥厚帯、17は隆帶間にそれぞれ二列の列点文が施文され、胴部は繩文を有する。4はRL、3、17はLRの単節斜繩文である。これらの土器の所属は難かしいが、ここでは串田新II式の中で一括しておきたい。

④中期末葉～後期初頭の土器（第4図5、6、図版4・上、5）

所謂、前田式もしくは岩崎野式に該当する土器である。

第4図5、6はいずれも口縁の外反が著しい平縁深鉢である。5は頸部に6条の深い平行沈線をひき、沈線間に斜方向の短沈線を連続して施文している。胴部は、RLの単節斜繩文である。6は、断面三角形を呈する所謂「突線文」で構成される土器である。突線文の上部には、隆帯と連続刺突によって背反する渦巻状のモチーフが描かれており、それ以下の胴部は垂下する突線文で充填される。その他に、従来より前田式の代表とされていた杵口状沈線とその間にジグザグ沈線を配する土器の一部や、貼り付けた隆帶上に粗大な刺突を施す土器（図版4・上）などもこの期に属するものであろう。

⑤後期前葉の土器（図版4・下）

沈線により三角形や同心円状などの幾何学的なモチーフが描かれるものや、三角形連続圧痕文が施文されている土器である。

気屋式に比定できるが、なかには堀ノ内I式に類するものも見られる。

これまで北陸における中期後葉の編年は、古串田新式→串田新I式→串田新II式→前田式と設定してきた（小島、1974）。近年では、中期末葉～後期初頭の前田式の組成内容が明らかにされる資料が一括して提示され、従来の所謂、杵口状に区画する沈線と雨滴状列点を特徴とする平縁深鉢を代表器形とする「前田式」の範疇を含め「岩崎野式」が

提唱されている（柳井、1976）。また、南久和氏は金沢市笠舞遺跡における土器群を検討する中から中期後葉の編年を再構成する試案を提示されている（南、1981）。

「串田新式」は、本遺跡発見の土器群より設定された石川、富山の中期後葉を画する土器型式であり（小杉高校地歴班、1952）、その後、小島俊彰氏により串田新I、II式に細分されたことは学史的に周知の事実である（小島、1964）。

だが、山形突起を有する波状口縁の深鉢においては、串田新I式と同II式の区別は明瞭であるのに対し、一方、小島氏も指摘する（小島、1972）ように各々の型式の器種構成については不明な点が多いことも事実である。とりわけ、串田新I式において波状深鉢とともに代表器形とされる工状区画の沈線や貝殻擬繩文で施文された平縁深鉢（第4図1、2）の系譜が串田新II式において不明確であることをはじめ、串田新II式の組成内容の不十分性が大きく指摘しうる。このような問題については、土器の文様要素、文様構成、器種構成の詳細な検証を行なう中で論及すべきことがらであるが、ここでは資料的及び時間的制約のため行えなかった。今後の追求課題としたい。現在、串田新式系土器群の器種構成をめぐる問題が指摘しうるが、波状深鉢において型式間の変遷が明瞭に辿れることをひとつ示標に、串田新I式、同II式を北陸の中期後葉を画する土器型式として柔軟性あるものと理解し使用したく思う。

2. 石 器

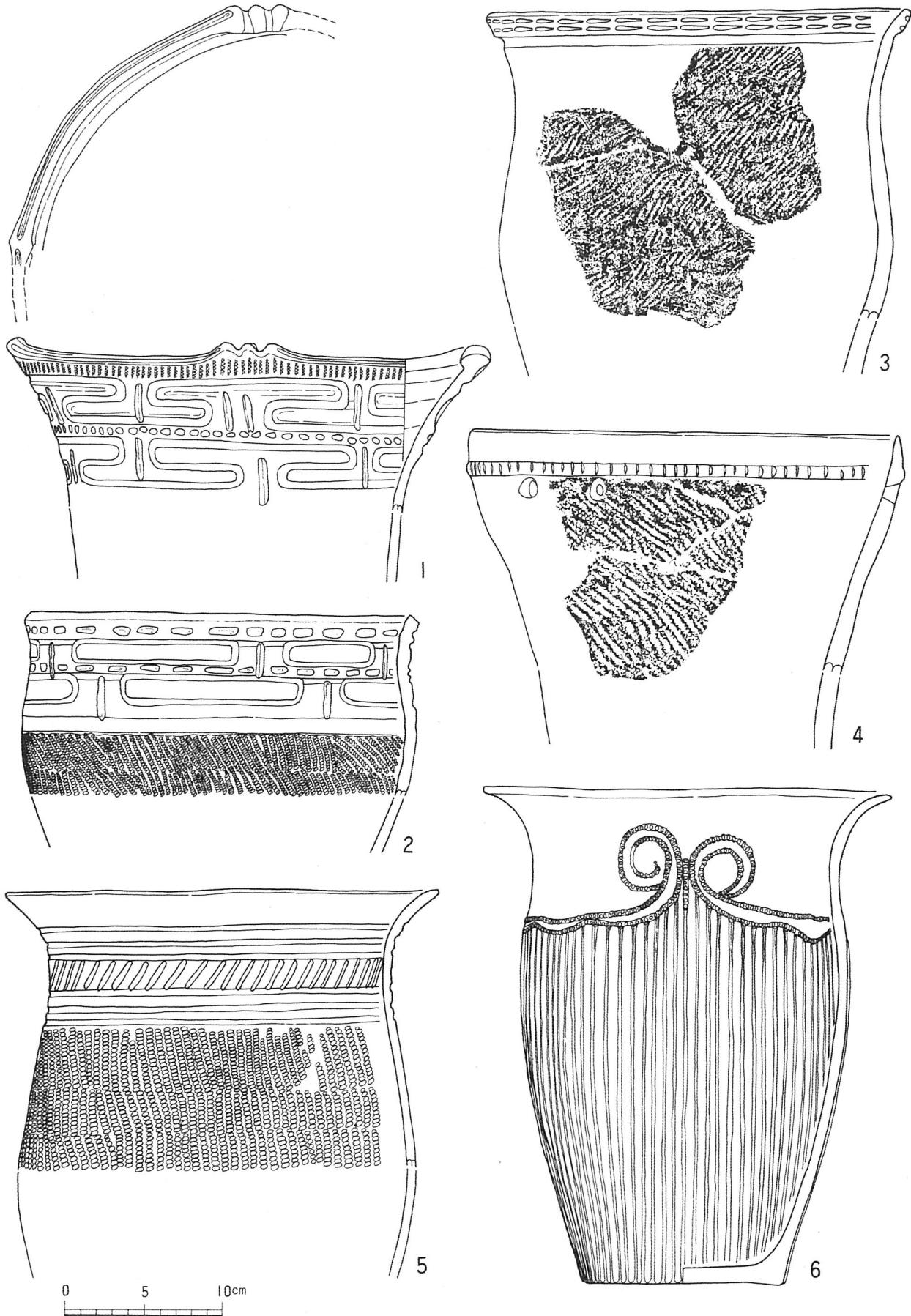
石器には磨製石斧9(8)、打製石斧15(6)、石鏃1、石匙1、礫石錐5、切目石錐1(1)、磨石・敲石17(6)、石皿3(3)、石棒2(2)であり、その他に小形磨製石斧状石器や剝片等が見られる。（（）内の数字は、各石器個体数のうち欠損品の数）。出土土器が、前述のように中期前葉から後期前葉の長い期間にわたるものであるため、石器の詳細な時期については判然としない。だが、出土土器のうちでも主体的であった中期後葉の時期に石器の多くは所属する可能性は高く、該期の石器組成のあり方を示唆していることと考えられる。

磨製石斧（第7図1～3、図版6・下）

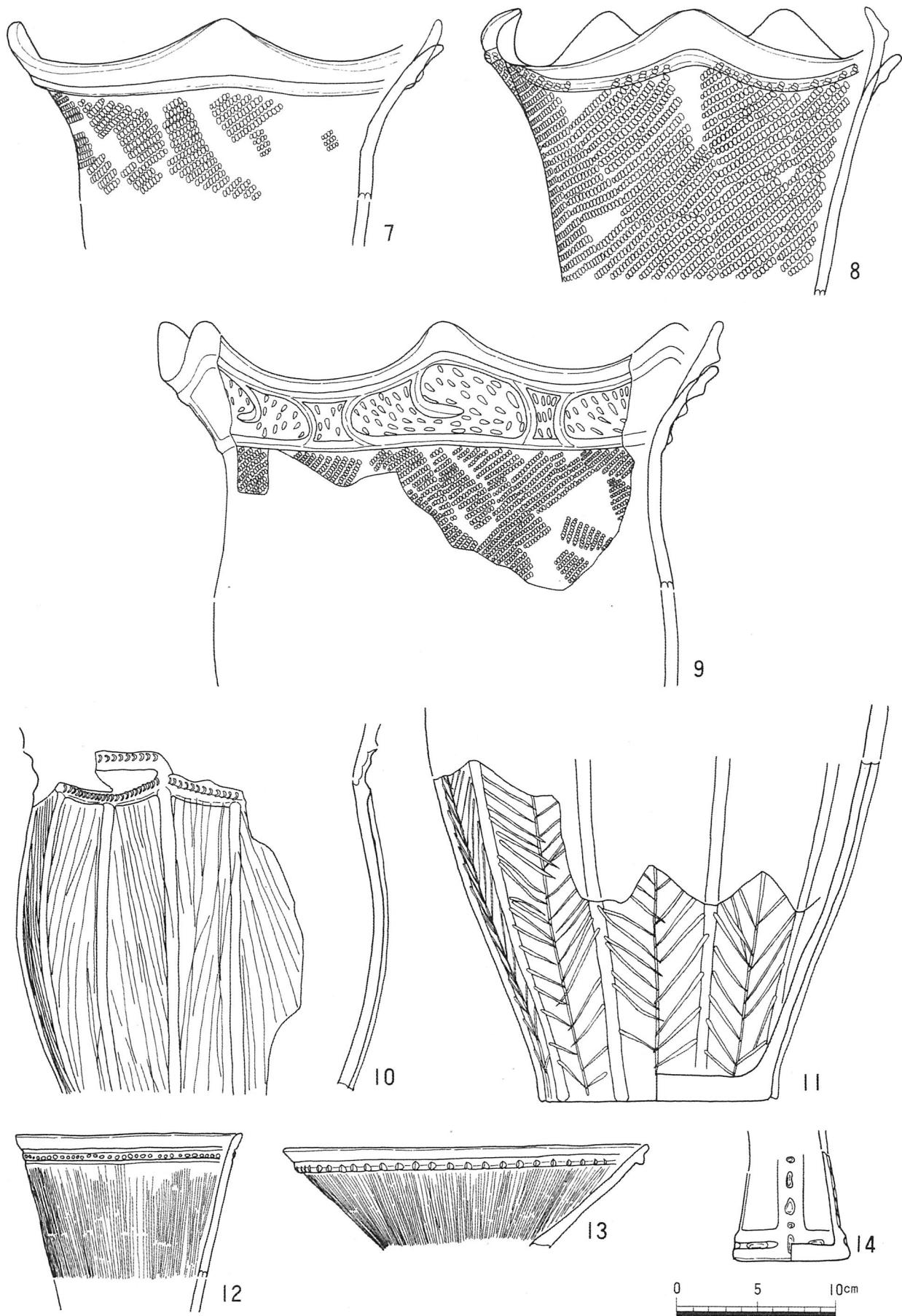
いずれも刃部を欠損させている。1、2はいわゆる定角式と呼ばれるものに含まれると考えられ、断面が長方形に近い形状を呈するが、3は橢円形に近い断面形状である。石質は、1、2は蛇紋岩系であり、3は硬質砂岩系である。

打製石斧（第7図4～8、図版6・下）

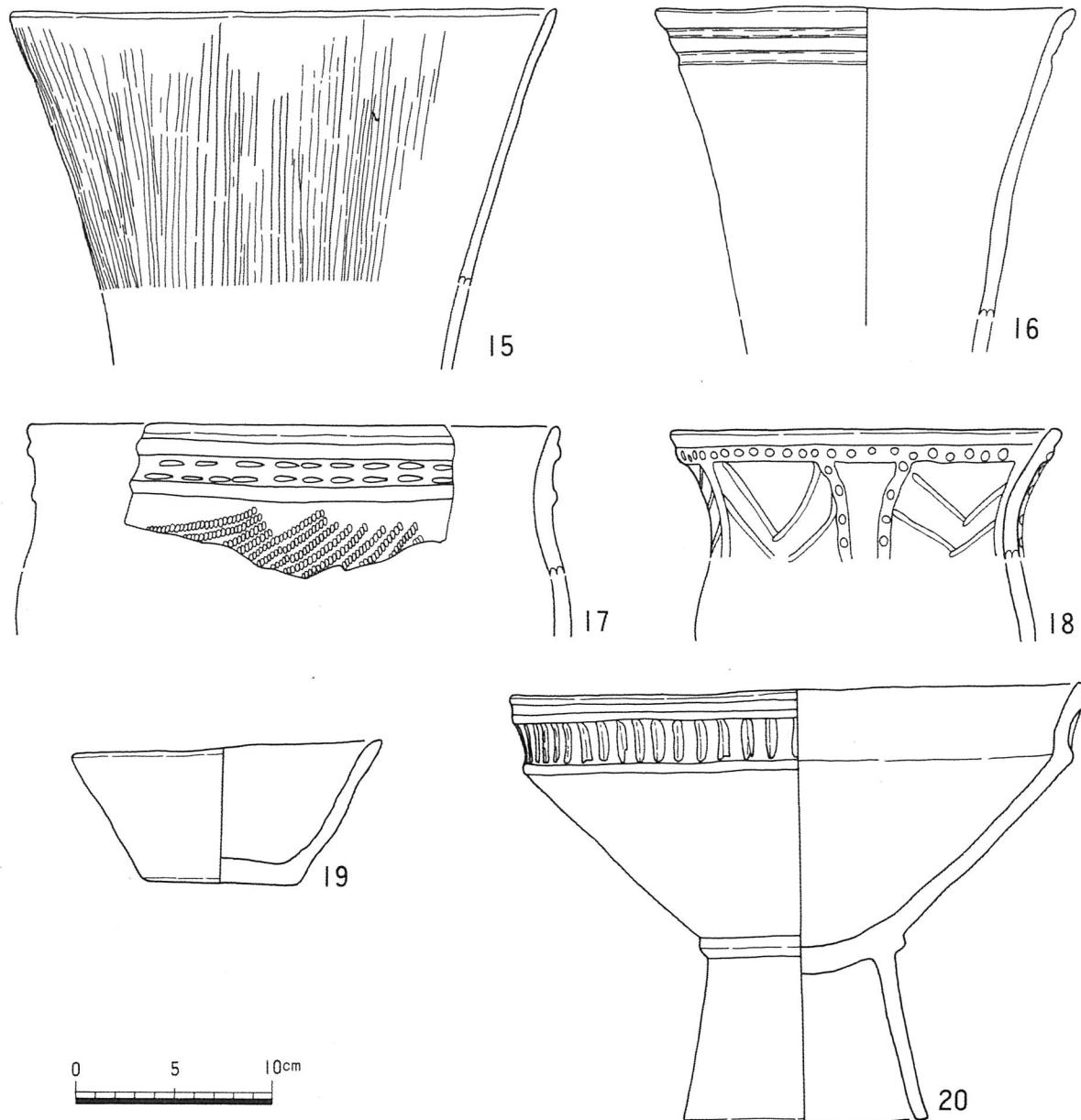
平面形態の相違により、短冊形と呼ばれるもの（4、5、7、8）と揆形と呼ばれるもの（6）に分類できる。刃部の製作には、片面に自然面を残し片面のみの加工でつくったも



第4図 土器実測図(1)



第 5 図 土器実測図(2)



第6図 土器実測図(3)

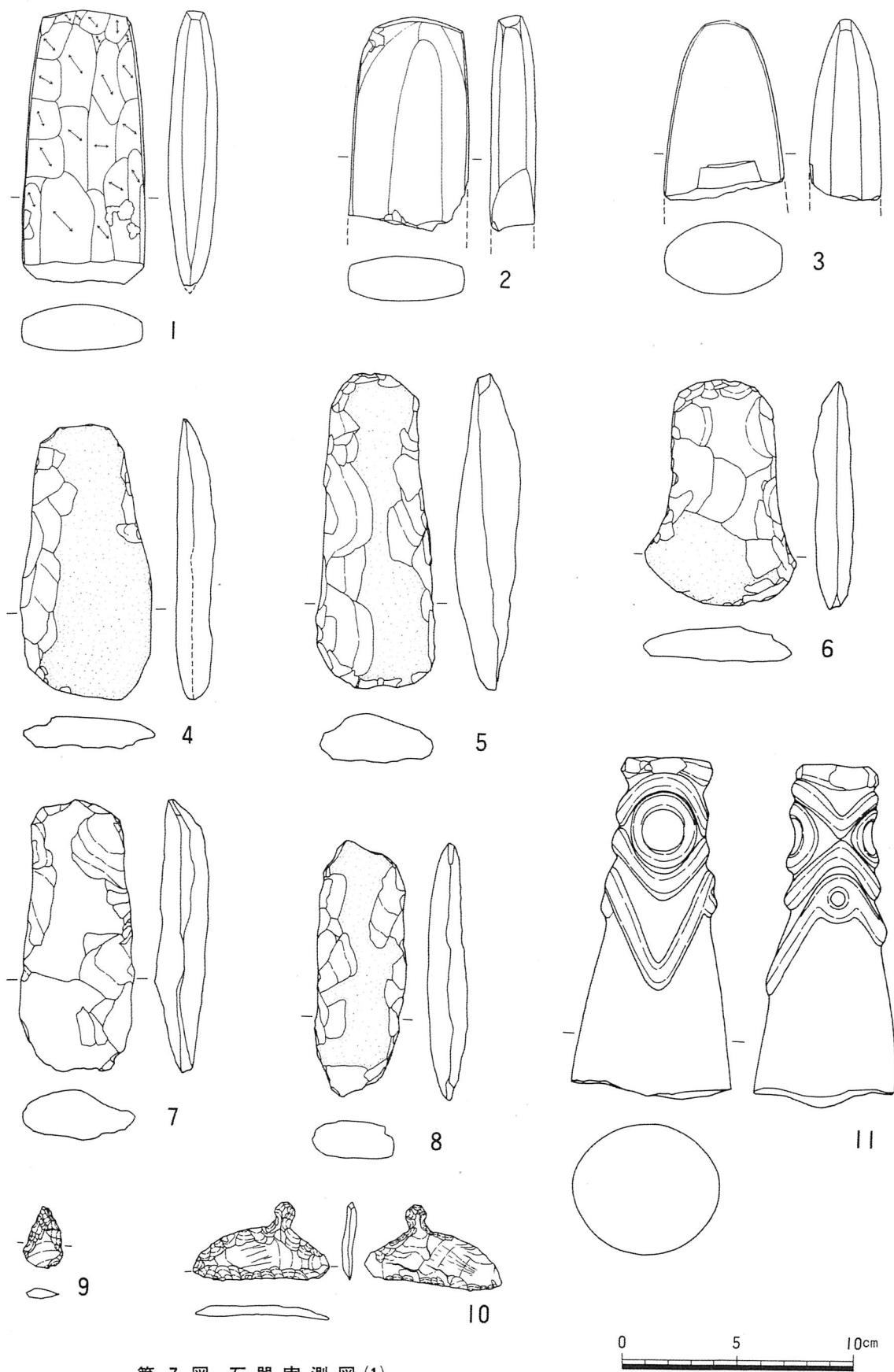
の(4、6)と、両面からの加工で刃部をついたもの(5、7)がある。また、なかには刃部に使用痕が明瞭に観察されるものも数点認められた。

石鎌 (第7図9、図版6・上)

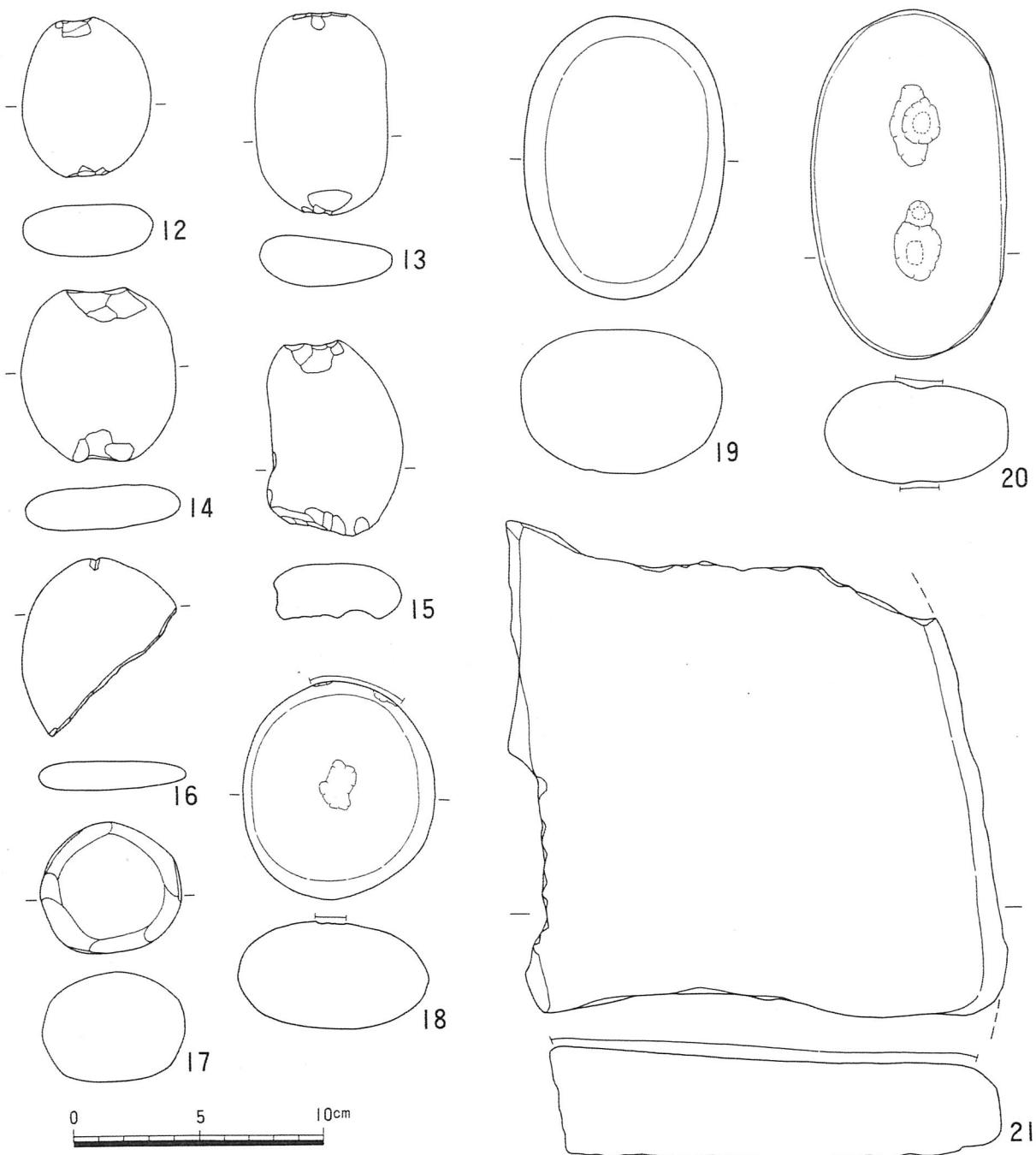
基部が丸味を帯び、三角形に近い形状を呈する。石質は安山岩系である。

石匙 (第7図10、図版6・上)

形態的に横型に分類でき、主に片面からの剥離加工によりつくられている。つまみは一方に偏しており、石質は安山岩系である。



第7図 石器実測図(1)



第8図 石器実測図(2)

石錘（第8図12～16、図版6・上）

礫石錘（12～15）と切目石錘（16）とがある。礫石錘は、割合偏平な石の両端を打ちかいたものであり、重量、大きさにバラエティーが認められる。切目石錘は欠損品であるが、断面が極めて薄いものである。礫石錘と切目石錘の性格の相違については、渡辺誠氏により後者は漁網用であるが、前者は編み物の錘具である可能性が指摘されている（渡辺、1976）。

磨石、敲石（第8図17～20、図版6・上）

磨使用のみのもの（17、19）、縁辺を敲打に使用したもの（18）、1～2ヶ所の凹みを有するもの（18、20）などがある。17は、割合小形で砂岩系の石質のものであるが、周辺を一方向に磨使用している。

石皿（第8図21）

全て欠損品であり、21は片面のみを使用している。磨石、敲石とセットとして堅果類の加工などに使用されたものだろう。

石棒（第7図11）

上部のみであるが、敲打等により丹念に製作されたものであり、3段のV字状の隆帯がめぐり、1、2段の隆帯は相反した方向で描かれ、その中に円形の彫刻が行なわれる。3段の隆帯は側面の高みに円形の彫刻が施される。この石棒については、小島俊彰氏の分類によれば、V字状隆帯で特徴づけられる第III型式に含まれよう（小島、1976）。

IV おわりに

今回の試掘調査は、史跡環境整備事業における見晴台設置に伴ない、設置箇所の遺構の有無の確認、遺物包含層の状況の把握を行ない、設置箇所を定め、その施行上の工法等の検討を行なうためのものであった。調査において、これまで述べてきたように遺構は検出されなかつたが、縄文時代中期後葉を中心とする多量の遺物を有する包含層であることが明確になり良好な出土資料が得られた。

だが、遺物の時期及び出土状況の観察所見において、調査地点の局地性にかかわらず出土遺物の時期が中期前葉から後期初頭までのかなり長い期間にわたり、なおかつそれらの層位的な区別は不可能であることがあげられる。この遺物包含層の形成については、先に北側斜面部への縄文人の廃棄行為について示唆しておいたが、別の側面からも考えられなければならない。つまり、この包含層は全て縄文時代該期における〈原位置〉な状況を示すものというよりも、かなり後世における人為を介在して解釈したほうが適当である面も否定できないのである。そのことについては、調査地点付近が近年まで梨、桃等の果樹栽培が行われていたことがひとつの証左になるであろう。

このように遺物包含層の性格をめぐって不明な点が多いが、出土遺物については、縄文時代該期の良好な資料群であることは確かであり、見晴台設置には次のことを留意して施工させるものとした。見晴台の設置位置に関しては、昭和56年度実施設計書の位置と同様

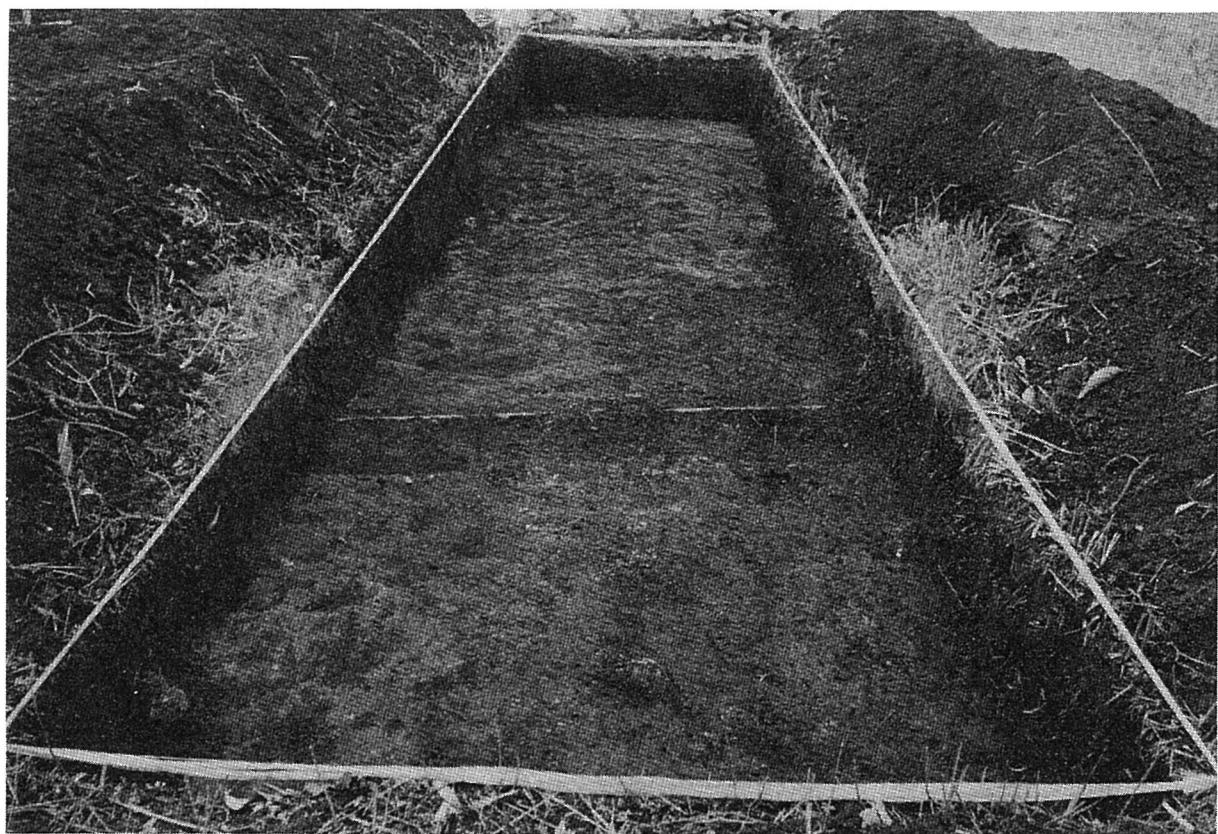
とするが、遺物包含層の比較的薄い北側斜面寄りに設置する。設置工事に際しては山砂等による盛土を行ない、基礎工事は最小限に留め遺物包含層を傷めない配慮をして工事をする。

また、縄文時代の出土遺物については、所謂、串田新式系土器の編年的再検討、石器組成と生業形態の復元、呪術的遺物と祭式の問題などの諸課題が想定しうる。これらの課題は、串田新遺跡をめぐる研究の深化のための重要な要素と言えるが、これまでの調査成果の総括的検討を通じて達成されるべきものであり、一朝一夕でできるものではないだろう。

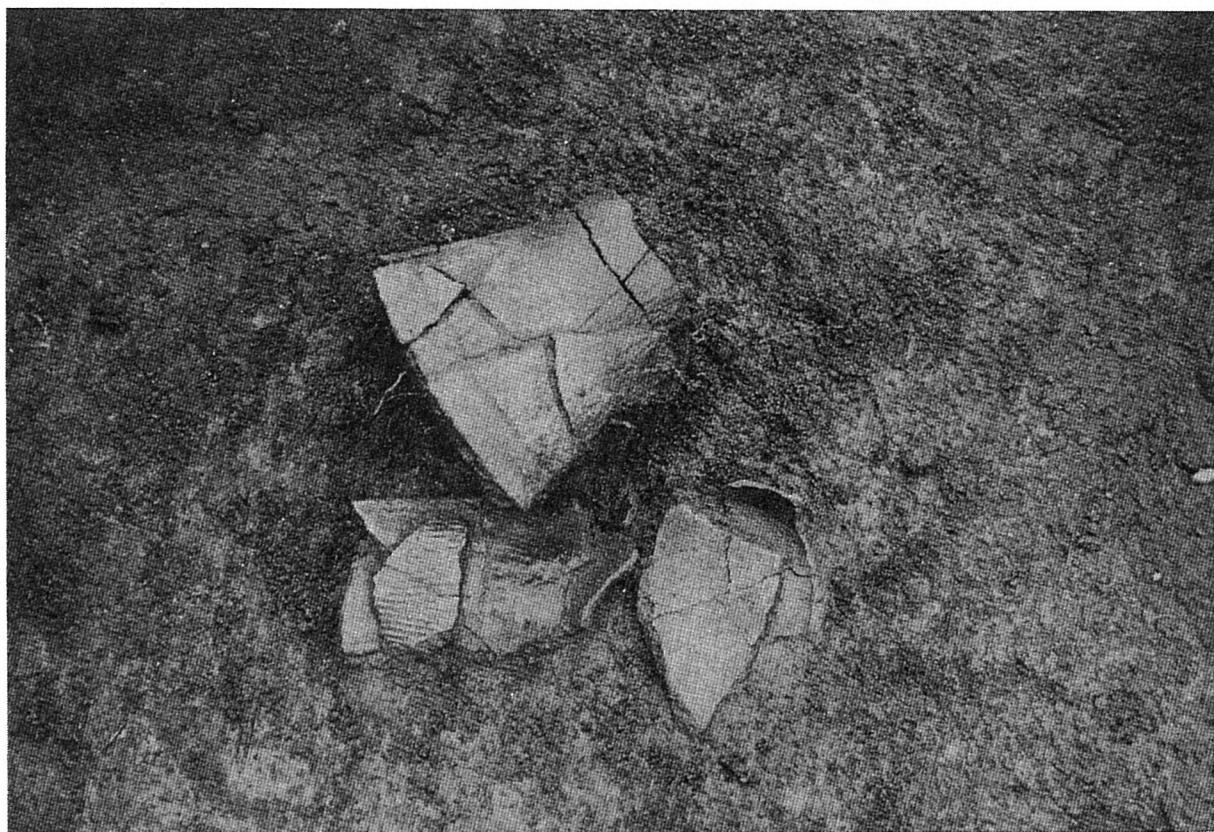
これら縄文時代の遺物をはじめ、今回の調査による諸成果については、今後、「串田新遺跡」史跡公園の活用計画のなかで具体的に位置づけ活用していくことをもって本書の結語にかえたい。

引用参考文献

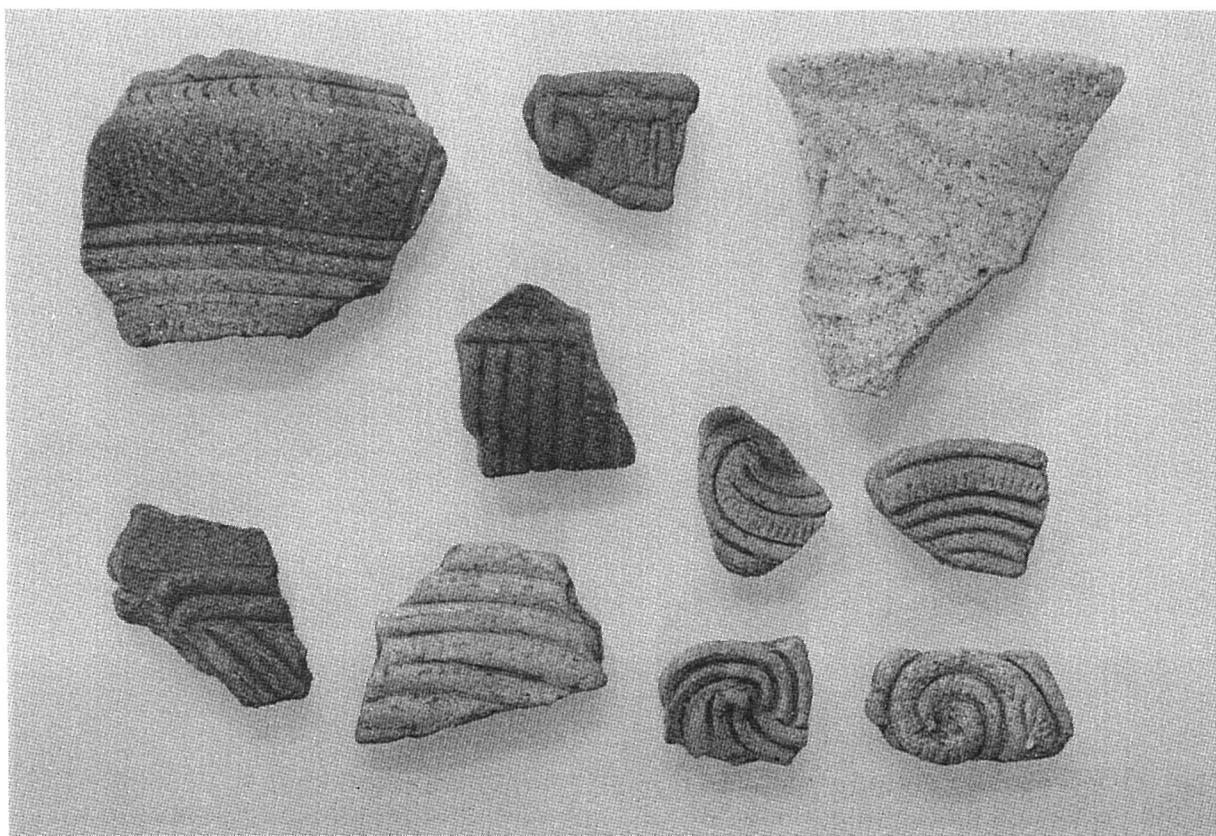
- イ. 池野正男・柳井睦 1976 『立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- ヨ. 小杉高校地歴班 1952 『串田新遺跡発掘調査報告書』
 - 小島俊彰 1964 『高岡公園小竹藪縄文遺跡』高岡市教育委員会
 - 小島俊彰 1972 「縄文中期」『富山県史 考古編』
 - 小島俊彰 1973 『朝日町下山新遺跡第1次発掘調査概報』富山県教育委員会
 - 小島俊彰 1974 a 「北陸の縄文時代中期の編年」大境第5号
 - 小島俊彰 1974 b 『城端町西原遺跡第1次発掘調査概報』富山県教育委員会
 - 小島俊彰 1976 「加越濃飛における縄文中期の石棒」金沢美術工芸大学学報25
- タ. 大門町 1977 『串田新遺跡環境整備 基本計画』
 - 高堀勝喜 1965 「縄文文化の発展と地域性——北陸——」『日本の考古学II』
- ナ. 中山修宏 1981 a 『串田新遺跡II』大門町教育委員会
 - 中山修宏 1981 b 『串田新遺跡III』大門町教育委員会
- ハ. 橋本正・神保孝造 1973 『串田新遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
 - 橋本正 1973 『大沢野町直坂遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
- フ. 藤田富士夫 1979 『北代遺跡試掘試掘調査報告書』富山市教育委員会
 - 藤田富士夫・三好博喜 1981 『北代遺跡』富山市教育委員会
- ミ. 南久和・荒木繁行 1977 『金沢市北塙遺跡』金沢市教育委員会
 - 南久和・上田亮子 1981 『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会
- ヤ. 柳井睦 1976 「4. 遺物 土器」『立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
 - 柳井睦・池野正男・久々忠義 1977 『大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- ワ. 渡辺誠 1976 「スダレ状圧痕の研究」物質文化26



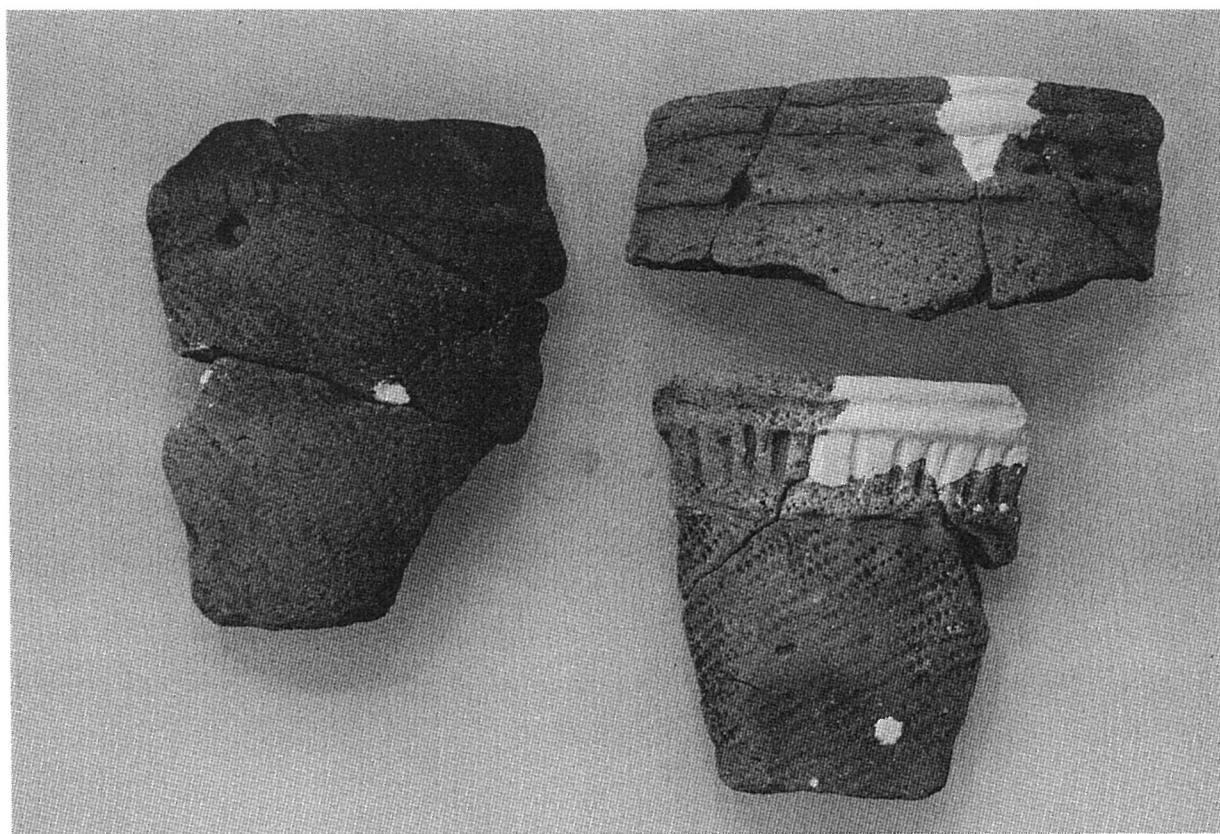
第3トレンチ



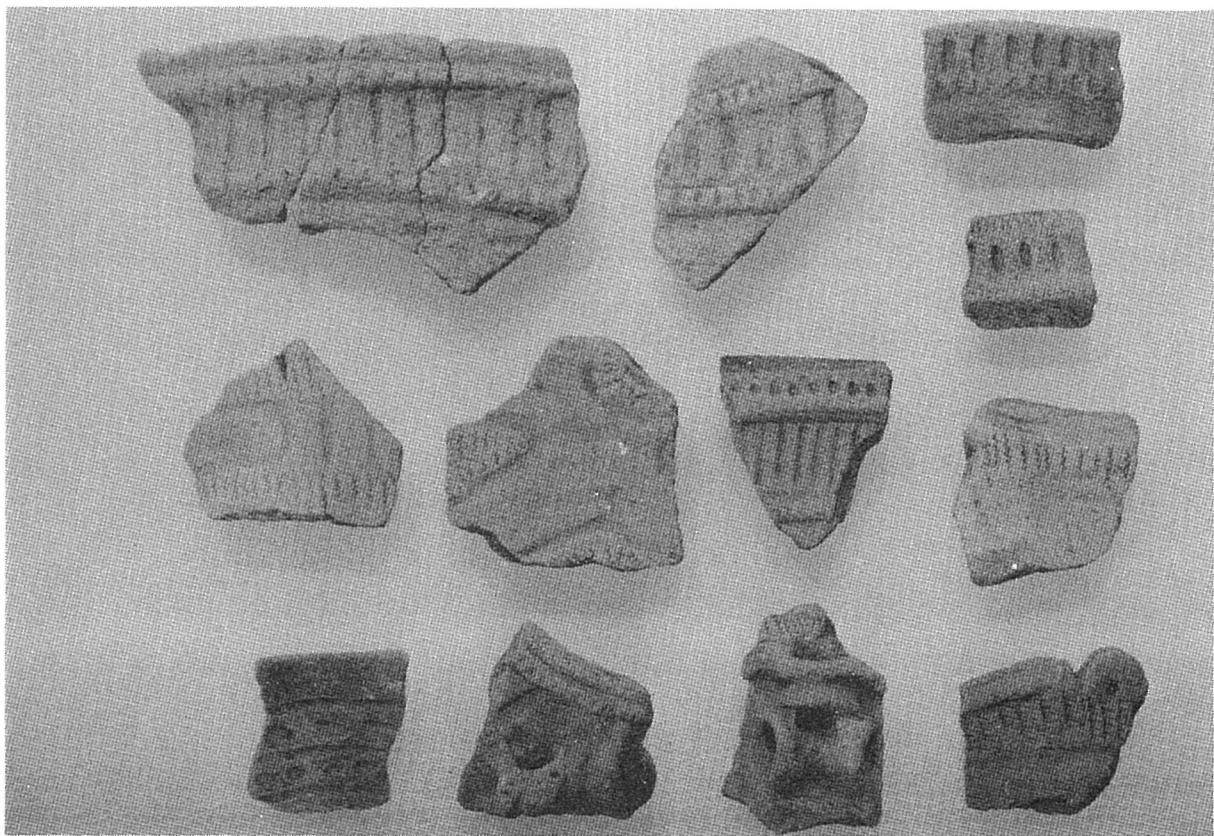
土器出土状況



縄文中期前・中葉の土器



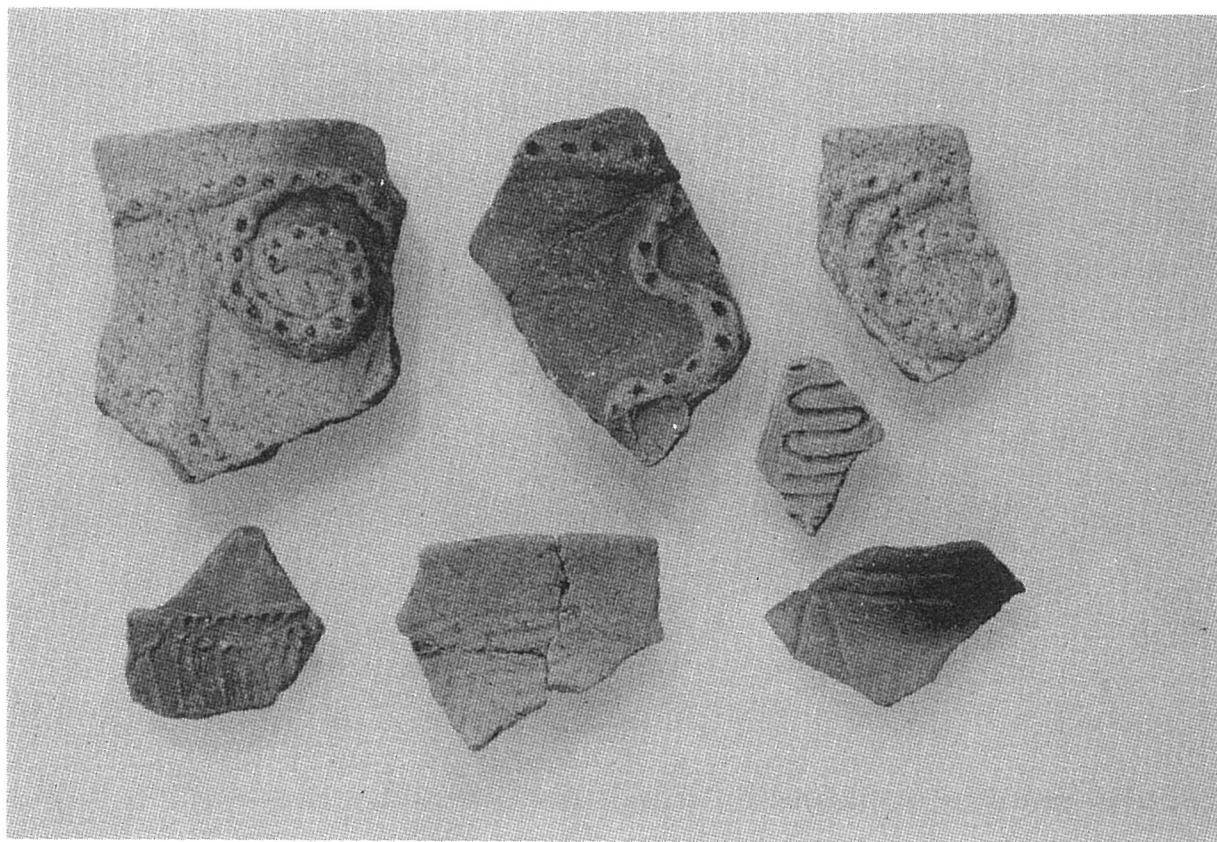
縄文中期後葉の土器(1)



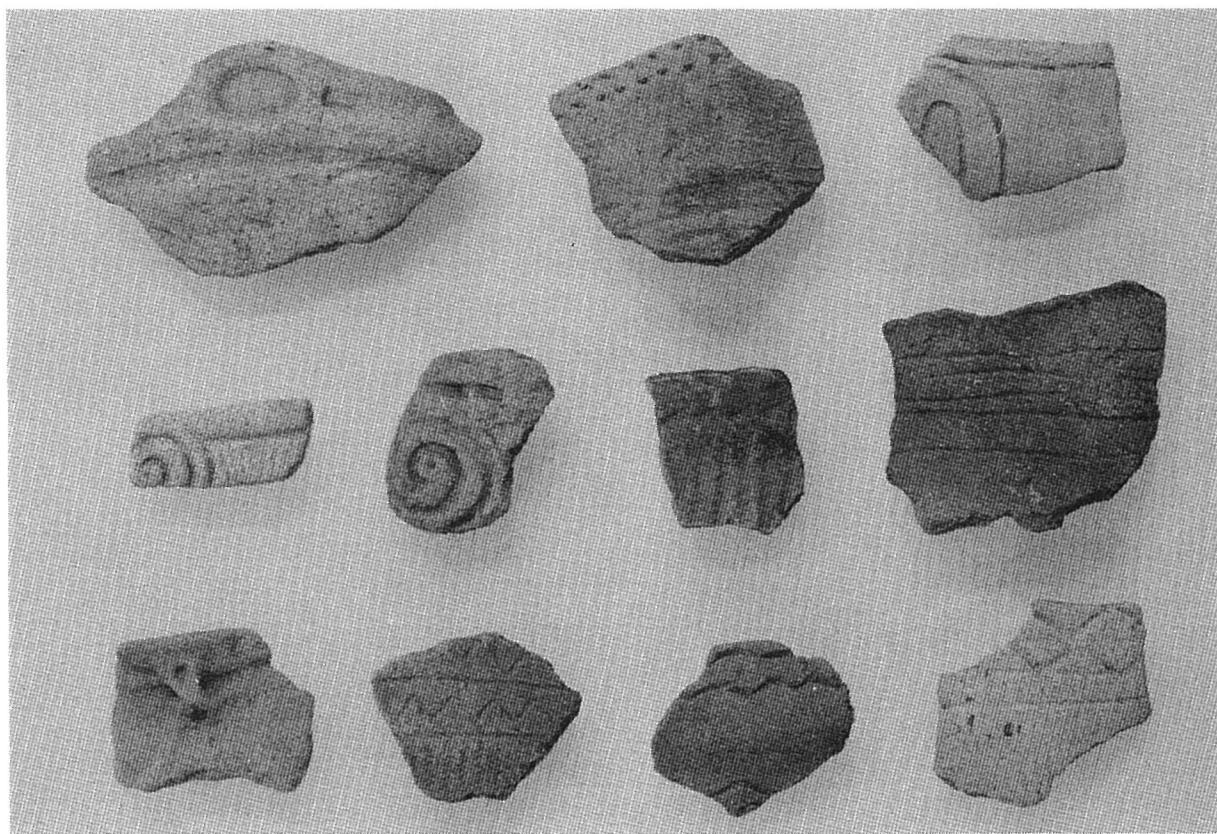
縄文中期後葉の土器(2)



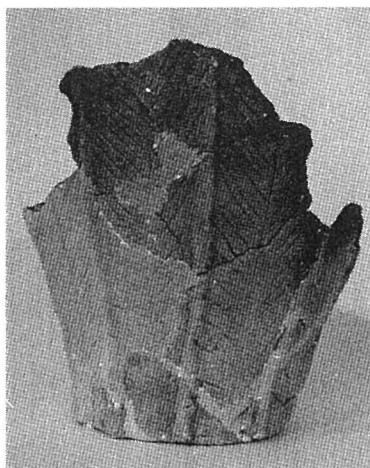
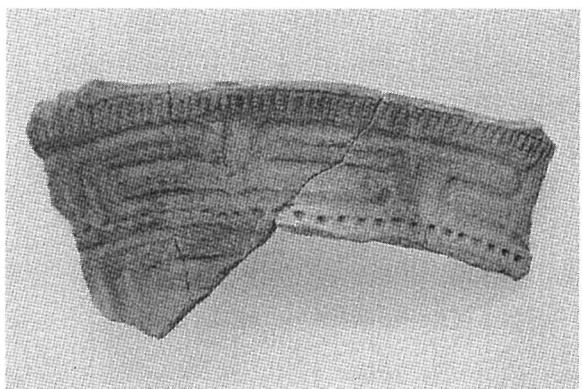
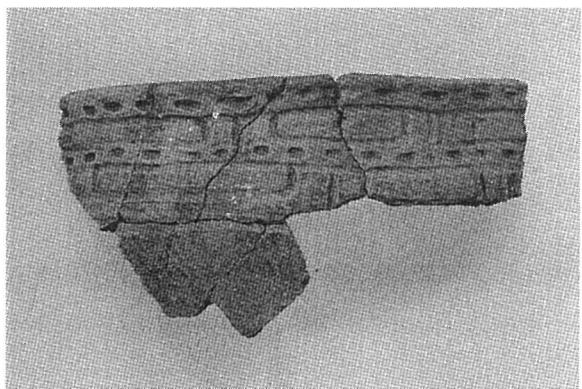
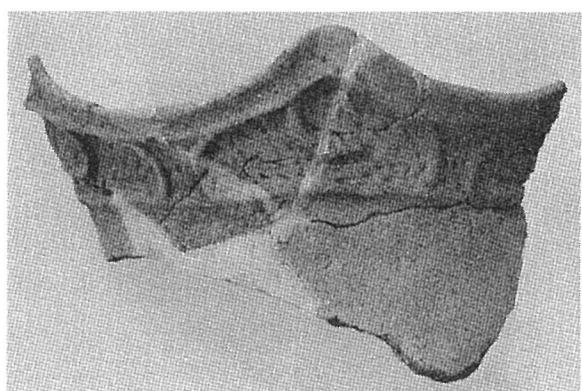
縄文中期後葉の土器(3)



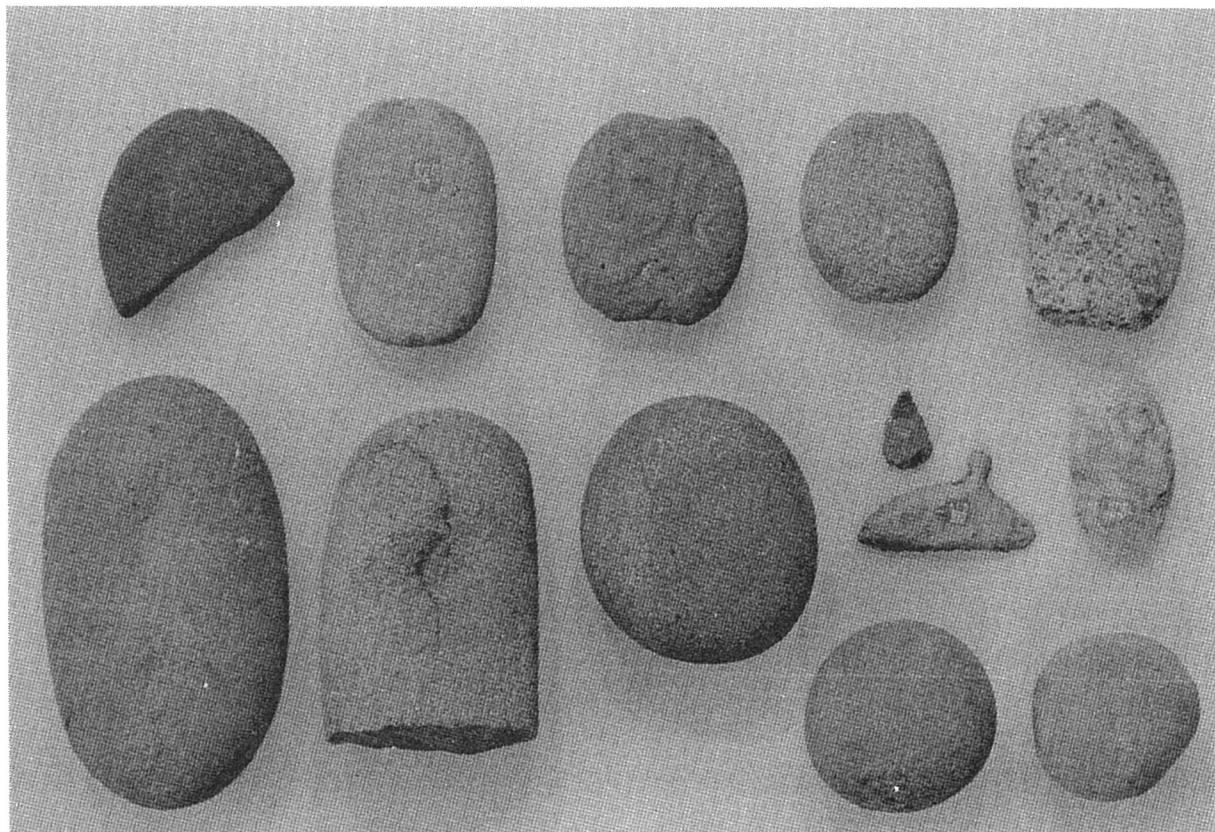
繩文中期末葉～後期初頭の土器



繩文後期前葉の土器



縄文中期後葉、中期末葉～後期初頭の土器



石器（石錘、磨石、石鎌、石匙）



石器（磨製石斧、打製石斧）

大門町埋蔵文化財調査報告第4集

串田新遺跡 IV

—昭和56年度環境整備に伴なう試掘調査—

発行日 昭和57年3月31日

発行者 大門町教育委員会

〒939-02 射水郡大門町大門67

印 刷 若 林 印 刷
